

11月学習会のご案内

平成24年11月7日

研究発表会にお越しくださりありがとうございました！



わたし個人としてはここで大きな研究会が終了してほっとひと息です。まず中国大会！最終的には総勢400人を越える結果となりました！鹿田小学校の先生方の授業が、子どもたちの育ちが充実して、それをみなさんと分かち合えてとても嬉しい会になりました。ありがとうございました。

そして附属小学校の研究発表会！全教科公開ではあるのですが700人を越える参加をいただきました。250部刷っていた国語科の当日資料も品切れになり、大変ご迷惑をお掛けした先生もおられた様子です。申しわけありませんでした。自分自身は「重ねて読む」という高学年らしい子どもの姿を見ていただくことができてよかったです。宮沢賢治の世界を子どもなりに解釈し、社会観・自然観にまで行き着いていく姿は、授業者として教壇に立っていてとても頼もしく感じました。わたし自身の反省点はいろいろあるのですが、ここでも子どもたちの育ちを感じられて嬉しい会となりました。

もちろん研究会は長い長い教育の一通加に過ぎません。子どもたちの育ちもここからさらに進化し続けていくもの。研究の終了を教育の区切りにははいけないと自分に言い聞かせながらこの原稿に向かっています。

少し残念だったのはこの2回の会で置いていた「おもしろ見つけ」のチラシが思ったほど持って帰られなかったことです。関心を示していただくには十分な一品だと思うのですがね。

語る会の先生方！みなさんの周りの先生方にしっかりアピールしていきましょう！国語を語る会の会合に一度参加して購入すれば2000円！語る会会員を経由して買っていただきましょう！そうすればずいぶんお得な値段設定です。本の準備には時間を要しますので、事前に附属小学校までメール等でご連絡くださいね。

日時 平成24年11月18日（日）9：30～12：00

※日曜日開催になります。ご注意ください。

場所 岡山大学教育学部附属小学校 2階 会議室

TEL(086)272-0511 FAX(086)271-3455

連絡先 小野 桂（おの けい） keikeioh@fuzoku.okayama-u.ac.jp

内容 説明的な文章の直観の仕方について 「天気を予想する」（5年 光村図書）

10月の学習会の報告

（文責 近藤昌子）

10月の語る会は、説明文の読みについて、今後の方向性を田中先生よりお話いただいた後、みんなで話し合いました。

田中先生より

○午前中、岡山中・高の国語の会での報告

中高一貫校で持ち上がった進学クラスのカリキュラム

高3は入試対策のため発達段階を考えての配列とはならない。中1, 2年生は普通クラスと変わらない。中3~高2までを取り上げる。

- 教科書に載っている学年相当の教材を扱うとは限らない。中3が特に違う。15教材の内、2~3教材は教科書, 15教材のうち半数を高校の教材から, 2~3割を中1~2の教材で扱い方を変えている。

教材がもつ特質・中心的な構造からセット教材を組む。比較が顕著な場合は比べて複数教材を読む。

高校教材の扱い方A:身に付けた読み方で読む。B:読み方を身に付けさせるために方法のところだけ使って簡単にしている。

- 高校1年, 2年は価値的な今知っていてほしいテーマを学期1つ選び, それに関する論説文, 説明文, 小説を組み合わせて読む。妥当性について話し合った。

高校1年 身体論: 芸術, 健康, 環境, 文化の違い, 日本社会の特質→社会についての認識を深める

高校2年 言語論

自由に教材を選べる→どう配置するか考える→教材の役割を考える。読みの能力に目を向ける。

反面難しさとして, 子どもの状況を知ると共に, 教科書編集者の教材配列の意味を知らなければならぬ。学年の発達に応じた教材を単元構成, 年間計画をしていくことが大切。

- 「若者が文化を創る」中2教材→筆者の考えに賛成か反対かを全員に考えを書かせて全員分コピー→どちら側に立つかを決めた後, 文章を読んで賛成すべきか反対すべきかを論の展開を追って確かめる。同じように, 中3で「舞姫」のあらすじの要約を示して, アドバイスを考えさせておく。→森鷗外はこの人に対してどういうアドバイスをしているか確かめさせる。→読みの姿勢が難しさよりも解決しようという意識になる。
- 小学校の説明文においても共有できる。読んで解決する姿勢をもつと読める部分が変わってくる。

小川先生より

- 「直観からの出発」は似た実践が多い。今回のおもしろ見つけの本は三次も含めバリエーションが豊富。前回よりも手ごたえがあり。11月上旬に本屋に並ぶ。
- テンタオの日本人学校(中学校)でおもしろ見つけ→受験対策用の生徒が集まりだした。子どもも保護者もその授業を選ぶ。内容より方法を読むからおもしろい。受験にも役立つ。転移性が高い。
- 200回記念をもちたい。おもしろ見つけ, 丸ごと読み, 説明的文章の読みの3つを提案したい。
- 六条院小学校は6年間で41回公開授業のペースの学校。

平井先生

「やまなし」の授業: 5月を3つに分けて授業: 「こわい」「きれい」の視点で読む。

「こわい」→スピードの観点, 「分からない」という観点

高学年らしいおもしろ見つけ→

「このことは~を表している」「作者は~を表していると思う」意味づける反応, 評価するような反応に動いていた。

- おもしろ見つけの難しさ
子どものよい反応をどう位置付けるかが課題
「書き手と対話している」「意味づけ反応をしている」といった返しが難しい。平易な授業だが奥が深い。教師のことばの力が必要。

平井先生より

高学年のおもしろ見つけが見えてきた。イメージをつなぐ→人間社会の縮図など自分なりの意味づけをしながら読むようになった。

子どもの反応に対して見逃したり位置付けにくかったりすることもあった。こちらの力をつける必要。

残り10分 青でいくか? 異質な赤でいくか? 迷った上で「赤」でいく。隣のクラスでは「赤」でよかった。自分のクラスではおもしろいところ。

小川先生

今までは「こわいよう, おとうさん」「大丈夫だ」「こわいよとうさん」の前後の「こわい」は何かを語らせる授業が多かった。そこをあえてカワセミの「赤」をもってくると意図があったのではないか。「赤」は何を表そうとしてここに入れたのかという意味づけ反応を子どもはしてくる。12月の色彩表現「月光」は月の光よりも作者との対話として出てくると思われる。

田中先生

高学年のおもしろ見つけ

漠然といい授業をめざしても、変わる実感がない。反応を育てる目的をもつと着実にどこにいるか実感をもつことができるようになる。自分の分かり具合が分かる。

田中先生 「読むことの教育の構想—丸ごと読み・おもしろ見つけを中心に」

- 日常生活において読む能力が発揮できるように教育を進める立場。物語はおもしろいと思いつけられること。物語を読む時には「直観」といった再構成されるイメージが大切。筋だけ分かればよいのではなく、作品への反応の仕方をストーリーの展開を追いながら共感的に感じ取ったり評価したりする授業構想が必要。
- 論説文はイメージを描くのは難しい。「ありの行列」はイメージを喚起しやすい作品といえるが、そういう技法を持ち込んでいる。対象を説明するものの方が多い。それに対応する力をつけていく立場。
- 読みに入る状況による反応の仕方の違い
 - A：知りたいことを理解する（学校教育ではあまり取り組まれていない、一部総合で扱われる）
→何を知りたいか明確にする。「～について調べる」では成果がなく、「こう考えるがどうだろう」という問題意識をもつと収穫がある。全然関係のないようなところからも答えが得られる可能性がある。
 - B：知りたいことは明確ではないが、情報を得たり納得したり意見をもったりして知的欲求が充足される場合（学校では中心）
→何についてどんなことが書かれているのか関心をもつ必要がある。読み手自身が評価を求められていることを意識する必要がある。言いたいことのためにどんな論理展開をしているのかを考える必要。小学校段階では見解を表に出さないのが評価を取り上げにくい。
 - C：読み取りの能力を高めるため（授業者がこれについて考えることが多い）
→Bの反応ができるようになる授業を対象に考える。
- 従来の指導：分からないところを前提にしてそれを解決するための授業構想
→日常生活では分かるところを対象に読む。分からないところは必要性に応じて問題にされる。分からないところを読み通そうとすると苦痛。分かるところを手がかりに文章の骨格部分に着目しようとする読みが必要。
- 論理の「直観」をもつ。二次の分析検証段階の学び合いを通して論理の直観の確かさや豊かさを高める。
→文章全体にかかる問いと答えとその過程に目を向ける読み方が中心になる。そういった読みの構えができると、早い段階で自主的に文章の骨格をとらえられるようになる。その基礎の上に分析的な反応や評価的な反応が加えられて確かで豊かな読みにつながる。
学力差は当然ある。みんなにできるようにすべきことは、自分の力で何がどう書かれていてどう説得されているかを読めるようにすること。
- 「天気を予想する」
冒頭に問いは出てこない。3つの問いがあり、①の問いと答えはすぐ分かる。そのことを前提として②の問いと答えがすぐ出てくる。またそのことを前提にして③の問いと2つの手立てが考えられて結びに向かう。何について述べられた文章かという「天気を予想する」について大きくは述べられている。「予報する」ではないので、天気予報的中率について述べるのが主体ではない。題名読みが大切。題に問いを予想する手がかりが含まれる。読み手自身が天気を予想することに主体的に関わる大切さを含んだ読み取りにつながる。
- 問いと答え
改訂前の1年生「いろいろなくちばし」・「じどうしゃくらべ」
「いろいろなくちばし」…写真による「統括する問い」をもっていた。結論に言葉での集約はない。
→現在「くちばし」・「みいつけた」・「じどうしゃくらべ」
「くちばし」…形態への着目と機能への問いが繰り返される。
「みいつけた」「じどうしゃくらべ」…「統括した問い」と「事例」として読む
→学年が上がるとともに問いが明示されなくなる。
どんなことが書かれているのか読む前から問いを意識して考えるという視点をもつようになる必要。そこを出発点として読みを修正したり深めたりする。
- 切れる人→核心をすぐ突く。大人社会でも一読して核心をつかむのがうまい人。世の中で求めら

れる力となる。

- 教材配列はその意味でよいかどうかは見直されなければならない。内容が読めている場合、表現の工夫のよさを授業することが多い→本当によいかどうかは比べないと分からない。だめなものやいいものを比べさせることで実感できる。
- 学習課題の設定（手引き）→これを見なくても、はなから問える力をつけたい。論理展開は学習者の中にもたせたい問いであり、問われて答えるべきものではない。

全体協議

小野先生

最初に子どもにとらえさせることは、3つの問いと答えの関係ではなく、核となる問いを見つけさせたいということか？

田中先生

3つの問いと答えがあるという感想はあってよいし確認は必要だが、文章全体の核心となる問いは何かを検討していかなければならない。

小川先生

直観を大切にそこから授業を構想することは「まるごと」も「おもしろ」も「説明文」も同じ。違うところ…文学的文章は感性的全体的把握で情意面の感想を確かめることで直観力が高められるのに対して、説明的文章は何について述べようとしているかが「直観」。直観とは何を直観すればよいのか、を考えていく。その窓口が、問いと答え、題名、全体をまとめている括の部分で「何について述べようとしているか」を確かめるのが説明的文章の学習の構想として組まれるのではないか。

田中先生

直観部分は何についての部分だけでなく、結論部分も含めて対象にする。何について書かれたもので、作者は最終的に何を述べていて、最終的に言いたいことに対してどのような証拠を出したり論理展開をしたりしているのかまでが直観の対象となるが、真ん中の部分はかなり重く簡単にまとめられない。問いと答えを柱にして「何についてかかっているのか」の部分がまずはもてたらよいのではないか。

小川先生

何について述べるかは小見出しや題名。しっぽをつけるにはかなり読み込んでいる状態。しっぽは多くの場合明らかではない。小見出しだけが分かっているしっぽがよく分からずに出発する場合と小見出しとしっぽがセットで追求が始まる場合があるのではないか。

田中先生

問いと答えがセットという意識が大切。問いだけでは分かったことにはならない。答えがセットになってこそ読者としてのコメントが成立する。作者を意識して読むことは小学校の段階でも必要。筆者と読者の対立までは小学校の教材ではないか。

小川先生

「天気を予想する」の文章

①的中率はどのように高くなったか？→答え

②百%的中するか？→答え

③突発的、局地的天気の前予想の手立ては？→答え

④まとめているところ 人々の天気を予想することについての営み

よりよい生活への営み→これを直観とすると、そのための①②③の問いになっているのかを検証していくと考えてはどうか

田中先生

論理展開から見ると、言おうとしていることは問いの配列が関係している。第一の問いはこの文章の問いになっていないので、この文章の問いを想定しなければならない。まとめの部分から逆に想定していくことが必要。「一人ひとりが予想する」ことがメインの話。統括する問いがなければ結論から推測するのも読み方。

子どもが直観を感じ取るには、はじめは題名とまとめがわかるのがスタート。漠然としている状態。鋭さを増すには、問いの想定、展開の分析が学習として必要。

最終的に言いたいことをとっておくことが多いが、最終的に結論はどこ？から入っていけばよい。

小川先生

括の部分を読む指導、説明的文章の結論から読む実践からそのよさの実感をした。直観の幅は広

い。直観の修正がおこり、新たな直観が成立してくる。本当に言いたいことが見えてくる。

田中先生

要約要旨の学習が説明文を読む学習の中核になる。要約要旨だけではないが密接につながってくる。骨格、論理展開も読む対象となる価値がある。例えば「姿を変える大豆」の例示の順序も必要。

松本先生

高学年は俯瞰してみることができる。筋道は大体分かる。筆者の思いを豊かに読むように膨らませてきたが、筆者の思いを豊かに読むとはどう考えればよいか。図や写真の効果的な使い方といったプレゼン能力はどう組み込まれていくのか？

田中先生

読者に共感させるために、どんな述べ方をしていくのかが学習対象になるため、その豊かさ確かさが取り上げられる。

小川先生

今までは時間をかけて何を言いたかったのかを見つけて要約をすることが最終的になされていた。括の部分は一次で確認可能。書き手はこんなことを知らせようとしているのでは？確かめてみましょうということが課題→の中率を高めるために、精度を上げるために、それ以上はどんな営みをしているのか、確かめる中に豊かな読みが得られるのではないか。

小野先生

要旨・要約が今まで最後に来ていたのがはじめに来るのでは、というのは分かるが、要旨がつかめたら、授業は終わってしまわないか？それを確かめる作業はどう構想されるのか？確かめていくならおぼろげでゆくゆくは括に向かうとならなければならないのではないか。

田中先生

最初にとらえたものはかなりぼんやりしている。読めたつもりが読めていなかったとなるのが大事。

小川先生

一次の授業の難しさ。一次はいろいろ出てきて幅があるから確かめようとなる。

田岡先生

「なんだ結局人なのか」とくる子どももいる。「予報の原点は人間だ」ならば、最初からそれだけを書けばよいのにそうではない。一番はじめの文は問いと答えとは関係しなくても、原動力になるのでは。

森山先生

説得力を持たせるために構成を考えさせるのは可能。

田中先生

解釈は読み手によって違う。予報の限界を書く人は知っている。予報は死にも関わることを知っている筆者がその情報にプラスして人も必要と言っている。「なんだ結局人なのか」の子どももプラスして「人なのか」になるのではないか。

小川先生

確率の数字は人間の力を示すともとれる。それ以上の大きな自然があることを語っているととれる。人間と自然を幅の広いスタンスからみられる広い目が養われるかもしれない。

田中先生

分かったつもりが実は読めていない経験→修正する経験がもてる学習が大切

名越先生

核心を得るための過程が「直観」に思える。文章の中で言われていることが直観なのか、自分がどう書かれているかまでを読んだことを含めて直観なのか？

人間だけでなく知恵を働かせてよりすぐれたことができるようにしていつている。が人間としての働きかけはずっと必要ということが最終とすると、それがとらえられるように追求していく方法を説明文の読みでしていけばよいか？

田中先生

問いと答えだけでなく、全部を含めて直観。核心の部分は最初から核心としてとらえられるわけではない。

「結局人なのか」は最初の直観ではあるが、不十分であり修正されていく。修正されたものは分析であって直観ではない。その経験を積むことで次の直観の精度が上がる。最終的には豊かさ確かさを含めた骨格が読めることが目標。そこに行くまでの過程は分析。分析の観点が組み込まれると、直観が育つ。読みが変わったから直観が育ったということではない。

小川先生

直観がどう成立するか？検証の中でどのような豊かな読みが成立するかを次回に考えていく。

村田先生

書かれていない問いを見つけるのは要旨を見つけるということなのかと思う。書かれていない問いをどう作るかは、子どもの文章への対応の仕方に関わる。最後の問いのところで自分たちがどうしていかなければならないかといった問いを立てる子どもと、人間と自然の関係をどう考えていくのかという子どもとでは問いが違ってくるのではないか。まとめに対する統括する問いを導くことは子どもにとっておもしろい学習となるのではないか。

小川先生

主題を読む＝中心文に線を引く、という人もいるが、文学の様々な形象には、無駄な形象は一つもない。それぞれの形象をつなぐことで本当のものが生まれてくると考えている。

最後が括＝答えの部分で要旨となると、それまでの段落は何だったのか。直観の「観」は、仕掛けとか諸々を観察して出てきたものが直観でなければならない。今までの天気に対する人々の営みをたどるとどうなるか→これまでの営みと共に何が大切なのかといった要旨が作られてくる。最後の括の部分は分かるが、それまでの問いの意味を考えるとむしろそうなる。答えの部分を作る過程の中でこの文章は何を語っているかを再吟味している。単なる中心文を見つけたら読めたということではなく、直観とは何かを大事にして文章への関わり方を授業ベースで教えてやりたい。

小野先生

分かるところからの出発、直観はいろんな段階があるとなると、学習課題として集約されるものなのか、いろいろ出てきておもしろ見つけのような課題設定となるのか？

田中先生

教材で違うのでは。納得できるかという集約された形も考えられる。

塩崎先生

直観を確かめることは批判的な読みに通じるところがある。それは本当かといった批判的な読みをすることで納得できるというのを今までやって来た。6年生では知識がないと読めないものもある。分からないものでも新たな知見を得るために読まなければならないこともある。分かるにはどうしたらよいかということも追求したこともある。一面的に筆者の書いている内容がよいわけではなく、読者を説得するための論法として落とししていくスタンスは分かりやすい。論の構成が分かるということが説明文が分かるということではないか。構成図が頭に浮かぶことも大切ではないか。

田中先生

六割くらいの共通理解かと思う。文章構造図は分析的。それよりも「この人はこう言っている」というのが大切。分析するときには構造図が有効という学習は必要かもしれないが、文章構造図で分析することが必要という学習は必要ない。

小川先生

マニュアル化はやめましょう。直観を話し合うときに、様々なレベルで張り巡らせましょう。構成だけでなく文末表現、擬態化、副詞にも書き手の意図。そこに立ち止まることで豊かな読みや書き手への意識が生まれる。

「おもしろ見つけ」の冊子を多くの方にお安く買っていただく方法

- ①身のまわりの方にチラシを渡して声をかける
- ②「**2310円のところ、2000円までのご提供が可能です!**」と声を掛ける
- ③お名前を控え、現金を預かっておく
- ④「**X冊注文します!**」と事務局(附属小 小野)に連絡する
(連絡方法は何でもよいです。)
- ⑤次回の語る会に参加し、現金と現物と交換する
- ⑥身のまわりの方に配布し、手にとって読んでいただく